

〈あいだ〉に立つ — 「第三者」の役割

「環境」とは「彼の世界」（西田幾多郎）である。〈私〉でも〈汝〉でもない「第三者」としての〈彼〉。第三者とはいかなる存在か。第三者はいかにふるまうべきか。第三者の視点から、環境問題を考えたい。

I 第三者とは何か

○環境は、〈私－汝－彼〉の三者関係

○主体は環境によって限定されるとともに、環境を限定する。→①

○当事者（私、汝）と傍観者（彼）は絶えず入れ替わる。

○〈対話〉の条件——第三者が立ち合うことによって、〈出会い〉から〈対話〉が展開する。
→②

II 第三者は何をなしうるか——三つの立場

①傍観者：〈私－汝〉の外に立つ〈彼〉
→プレイヤーとはならず、観察者でありつづける。

②共演者：〈彼〉から〈私〉へ
→傍観者から当事者に転じて、プレイヤーに仲間入りする。

③仲介者：当事者（私－汝）の〈あいだ〉に立つ
→〈中立〉を保ちながら当事者に働きかけ、仲介役を務める。

◎問い：

本日の発表事例に関して、各自いかなる立場を選ぶか？

[資料]

① 西田の「環境」概念

「有るものは何かに於てあると考えられる如く、物は環境を有つと考えられねばならない。……個物は環境に包まれ何処までも環境から限定せられるという意味を有するとともに何処までも環境から限定せられないものであり、かえって環境を限定する意味を有ったものでなければならない」(西田幾多郎「私と汝」『場所・私と汝 他六篇』上田閑照編、岩波文庫、1987年、268-9頁)。

② 対話と第三者の役割

「Aに属する主体甲と、Bに属する主体乙とが、言葉を交わす場面において、「二つのロゴス」がぶつかり合い、まさしく「対話」(ディアロゴス)と呼ぶべき状況を現出する。ここにおいて、「媒介者M」が浮上してくる。それを、人称的存在〈彼〉に見立てるなら、〈彼〉は、甲乙のいずれからも距離を置く中間者丙であることがふさわしい。……対立する二者の対話を成立させるためには、中立的な第三者が〈あいだ〉に立つことが、必要不可欠だからである」(拙稿「〈二〉と〈三〉のあいだ——対話の条件」『関西大学 文學論集』第七十二卷第一・二合併号、2022年9月、一八頁)。

[概要]

本日の「哲学対話」のテーマは、都市防災。環境問題のテーマである。昨年3月の「環境問題とは何か」では、空間のスケールをマイクロ・メゾ・マクロの三層に区別して、「中間」であるメゾ・スケール（地域）を中心にした取り組みを考えた。今回は視点を変え、環境を生きる人間主体に焦点を合わせ、〈私—汝—彼〉という人称の区別を手がかりに、環境をいかにつくっていくかという問題を考える。環境への働きかけは、「彼の世界」に生じる〈私〉の出来事。第三者である〈彼〉は、さしあたり当事者を取り巻く傍観者にすぎない。第三者とは何か。第三者に何ができるか。

I 第三者とは何か

環境を「彼の世界」と呼んだのは、西田幾多郎。「環境」が日本で論じられるようになったのは、1920年代後半、およそ100年前の昭和初期。〈環境が人間をつくる〉と同時に〈人間が環境をつくる〉という洞察をいち早く提示した—①。

[三つの論点]

- 1 主体は環境によって限定されるとともに、環境を限定する。
- 2 当事者（私、汝）と傍観者（彼）は絶えず入れ替わる。
- 3 〈対話〉の条件——第三者の仲介によって、〈出会い〉から〈対話〉が展開する。
→②

3—対話に関して、仲介者・調停役を務めるのは、当事者の外部、「中立」の立場をとる第三者。『〈中〉のロゴス』では、〈中〉の意味の一つである「中間性」を「媒介性」とする解釈を提起する。

1・2—中島みゆき『ファイト』の例：「闘う君」を「闘わない奴」が笑うだろう、とのリフレイン。表現主体（私）から聴き手（汝）に届けられるメッセージ。その内容が、環境を構成する一人一人の〈彼〉を揺さぶることにより、〈彼〉は表現する〈私〉に転じる。おのれのうちに共存する「闘う君」と「闘わない奴」の葛藤をつうじて、傍観者から当事者への変化（彼→私）が生まれる。

II 第三者は何をなしうるか——三つの立場

傍観者・共演者・仲介者のいずれを引き受けるかは、各自の課題。防災に関する問題提起を受けて、自分がどうふるまうべきかを考えていただきたい。

ちなみに私自身は、「仲介者」が務まるかどうかを検討したい。